



Host Defense

News Letter 2025-2

目 次

- 第36回日本生体防御学会学術総会を終えて
澤 智裕 (第36回学術総会長 熊本大学)
- 日本生体防御学会奨励賞を受賞して
Minkyung Jung (東北大学)
- 第37回日本生体防御学会学術総会のお知らせ
安達 穎之 (第37回学術総会長 東京薬科大学)
- 連載企画：受賞者の軌跡 井上 信一 (長崎大学)
- 研究室紹介 海老原 敬 (秋田大学)
- 令和7年度日本生体防御学会理事会議事録
- 学会事務局からのお知らせ
- 日本生体防御学会現役員 (令和6年1月～令和8年12月)
- 編集後記

発行：日本生体防御学会事務局
〒890-8544 鹿児島県鹿児島市桜ヶ丘8-35-1
鹿児島大学大学院医歯学総合研究科免疫学分野 気付
TEL : 099-275-5305 / FAX : 099-275-5306
E-mail : jshdr@kufm.kagoshima-u.ac.jp
学会ホームページ <https://jshdr.jimdofree.com/>

目 次

□第 36 回日本生体防御学会学術総会を終えて	p. 2
澤 智裕 先生 (第 36 回学術総会長 熊本大学)	
□日本生体防御学会奨励賞を受賞して	p. 4
Minkyung Jung 先生 (東北大学)	
□第 37 回日本生体防御学会学術総会のお知らせ	p. 6
安達 穎之 先生 (第 37 回学術総会長 東京薬科大学)	
□受賞者の軌跡	p. 7
井上 信一 先生 (長崎大学)	
□研究室紹介	p. 10
海老原 敬 先生 (秋田大学)	
□令和 7 年度日本生体防御学会理事会議事録	p. 12
□学会事務局からのお知らせ	p. 14
□日本生体防御学会現役員 (令和 6 年 1 月～令和 8 年 12 月)	p. 15
□編集後記	p. 17
□賛助会員一覧	p. 18

第36回日本生体防御学会学術総会を終えて

第36回日本生体防御学会学術総会・総会長
澤 智裕（熊本大学大学院生命科学研究部微生物学講座）

令和7年9月25日から27日の3日間にわたり、昨年12月にオープンした熊本大学病院の新施設「くすのきテラス」3階大会議場において「第36回日本生体防御学会学術総会」を開催いたしました。副総会長の安永純一朗先生（熊本大学大学院生命科学研究部 血液・膠原病・感染症内科学講座 教授）とともに、約1年にわたり準備と検討を重ねて臨んだ総会でした。開催期間中はいくつかの学会や研究会と日程が重なっていたにもかかわらず、全国から多くの先生方にご参加いただき、盛会のうちに無事終えることができました。ここに心より御礼申し上げます。ご支援・ご協力を賜りました会員の皆様、講演者、座長、そして理事長はじめ学会事務局の皆様に深く感謝いたします。

本総会では、「Multidisciplinary research in host defense mechanisms（生体防御機構の学際的研究）」をテーマに掲げ、感染症、免疫、がん、レドックス分子科学など、幅広い分野から生体防御の本質に迫る議論が展開されました。

初日には、長年にわたり日本生体防御学会を牽引してきた東北大学の赤池孝章先生による特別講演「超硫黄生命科学の新たな展開：超硫黄医療と社会実装」が行われました。赤池先生はレドックス分子科学の第一人者として、超硫黄研究の基盤を築かれた先生であり、その講演は本学会の歴史と未来をつなぐ示唆に富むものでした。続くシンポジウム「已年に紐解く 蛇（毒）のサイエンス」では、自然界の毒を通じて生体防御機構を読み解く新たな視点が紹介され、会場は活気ある討論に包まれました。



2日目には、琉球大学の山崎秀夫先生による教育講演「ストレス応答と生体防御」が行われました。山崎先生は、ストレスが生体防御機構に及ぼす影響を分子レベルから多角的に解析されており、その講演は、ストレスという普遍的な現象を通して生命維持の根幹を見つめ直す内容で、多くの参加者を強く魅了しました。続いて、九州大学・久留米大学・中村学園大学の住本英樹先生による特別講演「好中球と生体防御：活性酸素と細胞極性」では、九州を拠点に活性酸素研究を長年牽引してこ

られた先生としての深い洞察と情熱が語られました。赤池先生と住本先生という、本学会を長年支えてこられたお二人の講演を熊本の地で拝聴できたことは、本総会における大きなハイライトでありました。また、「マクロファージ・ルネサンス熊本」と題したシンポジウムでは、熊本大学の若手研究者らが中心となり、マクロファージの多様な機能と新たな制御機構に関する最新の成果を発表しました。本シンポジウムでは、「マクロファージ研究は熊本にあり」という自負とともに、熊本から全国、そして世界へと発信していく研究の勢いが示され、参加者の熱気が会場を包みました。

皆様の積極的なエントリーのおかげで多くの演題が集まり、一般演題では若手研究者を中心に活発な議論が展開されました。さらに、若手研究者を中心としたポスターセッションでは大学院生の情熱と創意が光り、若手優秀発表賞に選ばれた4名のうち3名が大学院生でした。また、日本生体防御学会奨励賞として2名が選出され、受賞講演が行われました。学会の未来を担う人材の育成という点からも、本総会は非常に意義深いものとなりました。

また、懇親会は熊本城を望む城彩苑にて開催されました。莊厳な熊本城を背景に、全国から集まった先生方が杯を交わし、学問や地域の話題に花を咲かせる、まさに心温まるひとときとなりました。コロナ禍以降2回目の対面懇親会でもあり、笑顔と活気にあふれる会場からは、本学会ならではの人と人とのつながりの強さを改めて実感いたしました。



熊本という自然と歴史に恵まれた地で本学術総会を開催できたことは、私にとっても大きな喜びでした。参加者の皆様には、学術的交流とともに、熊本の文化や人の温かさに触れていただき、心豊かな時間を過ごしていただけたのではないかと存じます。

最後に、第36回日本生体防御学会学術総会の成功は、ひとえに学会員の皆様お一人おひとりのご支援とご協力の賜物です。この場をお借りして深く感謝申し上げますとともに、本学会が今後も生体防御研究のさらなる発展と若手研究者の育成の場として発展していくことを心より願っております。さらに、本総会の開催にあたり多大なるご支援を賜りました贊助会員ならびに協賛団体・企業の皆様にも、心より厚く御礼申し上げます。皆様からの温かいご支援が、学術集会の円滑な運営と充実した学術交流の実現につながりました。ここに改めて深く感謝申し上げます。

日本生体防御学会奨励賞を受賞して

進化的に保存された超硫黄分子 *cyclo-octasulfur* (S₈) の生成と生理機能の解明

東北大学大学院医学系研究科 レドックス分子医学分野

Minkyung Jung

この度は、第 36 回日本生体防御学会奨励賞を頂き誠にありがとうございます。原 博満 会長、澤 智裕 総会長、ならびに選考委員会の諸先生方、本学会会員各位に対しまして、心より御礼申し上げます。あわせて、これまで多大なるご指導・ご助言を賜りました東北大学の赤池孝章 先生、研究室の皆様、並びに共同研究者の方々に深甚なる感謝の意を表します。

私は韓国デグ大学の学部生時代に、感染症が死因となる死亡者数が全世界の死亡者数の 26%を占めるという WHO の調査結果を知って感染症の治療や予防に関する研究を通じて苦しんでいる人々に役に立つ研究者になりたいと思いました。その後、学部 4 年生の時に 1 年間日本の佐賀大学で交換留学をして日本の基礎研究のレベルの高さに感銘を受けて日本で研究教育を受けたいと思い、デグ大学を卒業直後に熊本大学大学院医学教育部修士課程に進学し、当時微生物分野の赤池孝章教授のご指導のもと、当研究室が発見した活性酸素と一酸化窒素 (NO) のセカンドメッセンジャーである 8-ニトロ-cGMP の感染防御作用について研究を行いました。

その後、東北大学大学院医学系研究科の博士課程に進学し、8-ニトロ-cGMP のシグナル制御因子として同定された超硫黄分子の研究を始めました。超硫黄分子は、システインパースルフィド (CysSSH) のようにシステインのチオール基が過硫黄化した構造を持つ化合物ですが、分解されやすいため、正確な定性・定量が困難であり、これまで多くの硫黄代謝物の存在が見落とされてきました。そこで、私たちは超硫黄分子の分解を最小限にとどめた様々な解析技術を確立して、超硫黄分子の生成機構と生理機能を明らかにしてきました。この研究の過程において私は、超硫黄分子のユニークな化学特性に基づいた超硫黄化タンパク質の特異的、かつ高感度な検出法である PEG-MAL-labeling gel shift assay (PMSA 法) を開発し、生体内のタンパク質が高頻度に超硫黄化されていることを見出しました。タンパク質の超硫黄化は通常のチオール基より反応性が高いため、レドックスシグナル伝達や細胞機能制御への関与が示唆されています。そこで、ETHE1 (ミトコンドリアのグルタチオン代謝酵素) および ADH5 (NO 代謝酵素) を用いて酵素活性とタンパク質の超硫黄化との関連を調べたところ、活性中心のチオール基が超硫黄化していることが確認され、その状

態が酵素活性の調節に役立っていることが明らかとなりました。さらに、超硫黄分子の新しい生理機能として、世界中でパンデミックを引き起こした新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）に対する抗ウイルス活性を同定しました。SARS-CoV-2 が感染した宿主の中で自分自身を複製・増殖させるには、チオールプロテアーゼ（パパイン様プロテアーゼ PL^{pro} や 3C 様プロテアーゼ 3CL^{pro}）と呼ばれる酵素が不可欠です。そのため、当時はこれらのチオールプロテアーゼを標的とする抗ウイルスの仕組みについて盛んに研究していました。私たちは、生体内で生成される超硫黄分子が SARS-CoV-2 のチオールプロテアーゼを阻害する可能性があることに注目しました。そこで、組み換え PL^{pro} および 3CL^{pro} を用い、グルタチオントリスルフィド (GSSG) や無機超硫黄分子 (Na₂S₂, Na₂S₃, Na₂S₄) がプロテアーゼ活性をどのように阻害するかを解析しました。結果として、これらの超硫黄分子は PL^{pro} と 3CL^{pro} の活性中心に結合し、ウイルスのプロテアーゼ活性を著しく抑制することが分かりました。加えて、SARS-CoV-2 に感染した VeroE6/TMPRSS2 細胞や感染動物の解析でも、超硫黄分子による抗ウイルス効果が確認されました。

最近、私たちは細菌や古細菌でエネルギー代謝に関わるとされていた *cyclo-octasulfur* (S₈) が、ヒトを含む哺乳類の細胞でも大量につくられていることを発見しました。現在、S₈ がどのように作られ、どんな生理的役割を持つのかを調べています。S₈ は非常に極性が低く溶けにくいため、脂質膜や脂肪滴に存在すると考えられます。実際に、脂肪細胞を使ったラマン分光法による検出試験で、S₈ が NO 合成酵素 (NOS) によって生成され、積極的に脂肪滴に蓄積されることが分かりました。また、脂肪滴内の豊富な S₈ が脂質過酸化を抑制し、細胞のフェロトーシスを制御していることも突き止めました。さらに近年は、重要な国民病のひとつとして注目されている変形性関節症にも焦点を当てています。すなわち、変形性関節症モデルマウスにおいて滑膜組織の脂肪細胞を標的とした S₈ 投与は脂質過酸化反応の顕著な抑制効果を示しました。この結果は、S₈ 補充療法が変形性関節症などの難治性疾患に対する新しい治療戦略として活用される可能性を示しています。

最後に、本奨励賞を励みに、生体防御学会の発展に微力ながら大きく貢献するように精進してまいりたいと思います。今後とも皆様からのご指導、ご鞭撻のほど、何卒宜しくお願ひ致します。

第37回日本生体防御学会学術総会のお知らせ

学術総会長：安達 賢之 先生（東京薬科大学 薬学部）

会期：令和8年（2026年）9月9日（水）～11日（金）

会場：東京たま未来メッセ（東京都八王子市）

◆ 特別講演：田中 正人 先生（東京薬科大学 生命科学部）

小山 文隆 先生（工学院大学 先進工学部）

◆ 教育講演：石井 健 先生（東京大学 医科学研究所 感染・免疫部門 ワクチン科学分野）

◆ シンポジウム

◆ 一般講演（口頭、ポスター）

【東京たま未来メッセ HP】

https://www.tamaskc.metro.tokyo.lg.jp/?utm_source=google&utm_medium=cpc&utm_campaign=web_pr_2023&gad_source=1

東京都八王子市明神町3丁目19-2

※JR八王子駅は北口、
京王八王子駅は中央口をご利用ください。

tel : 042-697-0802



受賞者の軌跡（第4回）

寄生虫感染免疫研究の軌跡と出会いの奇跡

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 免疫学分野
井上 信一

私は、2013年度に「マラリア原虫感染防御における $\gamma\delta T$ 細胞の役割の解明」の研究で日本生体防御学会奨励賞を受賞しました。早いもので、もう十年以上が経過しました。私は、2010年より、杏林大学医学部感染症学教室（助教～講師）に在籍し、当時寄生虫学部門を率いておられた小林富美恵先生のもとでマラリア免疫に関する研究をスタートしました。大学の恩師である林純一先生の推薦もあり、免疫学や感染症学の研究経験の無い私を、小林先生は助教として雇い入れてくれました。当時の私は、大学院を卒業してから3年間ポスドクとして神経変性疾患の研究に携わっていましたが、正直なところ、研究の方向性に悩んでいた時期でした。新たに感染免疫学研究へと分野変更をしたことが功を奏し、幸運にも、今日まで自分の興味を持って打ち込める研究を続けることができています。

マラリアは依然として人類に甚大な被害をもたらす世界的な感染症であり、その免疫防御機構を明らかにすることは新たなワクチン開発や治療法の基盤となります。2010年にマラリア免疫の研究をスタートした際に注目したのが、自然免疫様リンパ球である $\gamma\delta T$ 細胞でした。以前から、マラリア患者やマラリア動物モデルの血中や脾臓内で $\gamma\delta T$ 細胞の増加が見られていたことから、マラリア研究において $\gamma\delta T$ 細胞は一つの研究トピックでした。しかし、実際にマラリアに対してどの様に関連しているのかは未解明の課題でした。私たちは、自然免疫と獲得免疫をつなぐ存在として $\gamma\delta T$ 細胞がどのようにマラリア防御免疫に寄与するのかを明らかにしようと試みました。弱毒化マラリア原虫によるマウスマラリアモデルを用いた解析の結果、マラリア原虫感染の初期に $\gamma\delta T$ 細胞が樹状細胞の活性化を介してマラリア免疫防御を促進する仕組みを解明しました¹。この成果をまとめた研究に対して賞をいただけたことは、研究者として大きな励みとなりました。その後もマラリア免疫研究を続けるなかで、2018年に現所属の長崎大学大学院医歯薬学総合研究科・免疫学教室へ准教授として異動しました。長崎大学に異動後は、マラリア感染における $\gamma\delta T$ 細胞の機能解析を進めるとともに、マラリアに対するCD4⁺T細胞記憶免疫に注目し、遺伝子改変マウスやトランスジェニックT細胞系を駆使して免疫記憶形成と維持に関わる分子機構を解析しています^{2,3}。

長崎大学は、熱帯病医学研究所や国内初となる感染症研究を目的とした BSL-4 施設などを有し、伝統的に感染症研究が盛んな環境となっています。そのため、国内外の感染症関連の研究者との交流機会も非常に盛んになりました。最近では、インド、フィリピン、タイの研究者とプロジェクトを進めるなど、研究対象の流行地域において実際にその現場を体験するという大変貴重な機会に恵まれています。残念なことに、私は海外留学する機会に恵まれませんでしたが、本学には国際色豊かな留学生が所属していますし、先述の通り国際共同研究も進めている現状を考えると、逆に恵まれているのかなと思っています。最近では、動物モデルを用いたマラリア免疫研究のみならず、国際共同研究グループによるリーシュマニア原虫感染モデルを使ったワクチン開発研究にも関心を広げています⁴。しばしば「日本では流行していないマラリアなどの感染症をなぜ研究するのか」と日本人研究者に問われることがあります。私は、何か使命感を持って寄生虫感染免疫学研究を始めたわけではなく、偶然の出会いによって研究をスタートしたため、単に“興味深い研究テーマだった”というのが当初の本音でした。しかし、流行地からの留学生と知り合い、実際に流行地に出向いたりすると、これはなんとか解決しないといけない非常に大きな問題であると実感します。そもそも、日本の豊かな生活は、国際社会とのつながりの上に成り立っています。先進国である日本も、世界との協力と支え合いの中で発展してきたことを忘れてはなりません。私は、先進国の研究者が、現在日本で流行していない感染症の基礎研究や技術開発に関与することは、国際社会における連帶と責任の一環だと考えるようになりました。

今までの私の研究生活を振り返ると、決して順風満帆ではありませんでしたが、国内外の多くの先生方や学生に支えられ、研究を継続できていることを実感しています。これから研究の道を歩もうとする学生や若手の方々には、失敗を恐れず新しい課題に挑戦してほしいと願っています。研究は苦しい時期もありますが、仮説が少しずつ実証され、新しい知見として形になる瞬間は何物にも代えがたい喜びです。また、一人で完結するものではなく、多くの人の議論や共同作業の中でこそ発展していくものだと強く感じています。

最後になりますが、このような寄稿の機会を与えてくださった学会に深く感謝申し上げます。また、感染免疫学研究へと導いてくださった恩師、林純一先生と小林富美恵先生にも深く感謝申し上げます。今後も、日本生体防御学会の場を通じて新たな出会いや議論が生まれ、この分野の研究がますます発展していくことを願っております。

参考文献

1. S-I. Inoue et al., *Proc. Natl. Acad. Sci. U.S.A.* 109:12129-12134 (2012)
2. Y. Ibraheem et al., *Front. Immunol.* 15:1426316 (2024)
3. M.L. Macalinao, S-I. Inoue et al., *EMBO Mol. Med.* 15: e17713 (2023)
4. T. Pacheco-Fernandez*, L. Klenow*, S-I. Inoue* et al., *Submitted*, *Equal contribution



写真：タイ・ミャンマー国境を背景に、タイのマラリア流行地域にて（2025年5月撮影）

ミャンマー側からタイ側へ、診断と治療を求めてマラリア患者が国境となるサルウイン川を渡ってくる。

研究室紹介

秋田大学大学院医学系研究科微生物学講座
感染制御総合センター感染分子病態研究部門

海老原 敬

2027 年、第 38 回日本生体防御学会学術総会の総会長を務めさせて頂く海老原敬です。現在、助教 2 人（高須賀俊輔助教、立松恵助教）、技術専門職員 1 名、博士課程大学院生 5 名で研究を行っております。私は北海道大学医学部出身で元々は小児科医でした。自然免疫という概念が生まれて、免疫学に興味を持ち、旧北海道大学医学部細菌学講座 濑谷司先生（第 19 回総会長）、松本美佐子先生、押海裕之先生（第 31 回総会長）、新開大史先生（第 35 回総会長）との出会いで、サイエンティストを目指すようになりました。北大の後は、WashU の Wayne Yokoyama 博士の元で 7-8 年過ごし、NK 細胞・自然リンパ球の研究を行いました。「日本免疫学会きぼうプロジェクト」という帰国支援のお陰で日本に戻ることになり、2016 年から理化学研究所-IMS 谷内一郎先生のラボで、半独立のような形で研究させて頂きました。2019 年から現職に着任し、2024 年度から秋田大学感染制御総合センター兼任となり、松永哲郎教授、張田力助教とも一緒に仕事をしております。

私の研究者としての原点は、「何でただの風邪が酷くなる子と酷くならない子がいるのだろう」「何でこの子は次から次へとアレルギーになっていくのだろう」という単純な疑問です。主な興味は初期・自然免疫応答であり、自然免疫の中で自然リンパ球 (ILC) を介したあらゆる免疫応答の研究して参りました (Ebihara, JEM 2010; Ebihara, PNAS 2013; Ebihara, Nat Immunol 2015; Miyamoto, Nat Commun 2019; Ebihara, Trends Immunol 2019; Yamada, JEM 2023; Tatematsu, Cell Rep in press)。 ILC はヘルパーサイトカインを産生することで免疫の方向性を決める組織常在性のリンパ球で、抗腫瘍免疫と抗ウイルス応答を誘導する NK・ILC1、アレルギー炎症を誘導する ILC2、抗細菌防御を行う ILC3 に分類されます。最近は T 細胞にも色気を出しておらず、免疫の奥深さを実感しているところです。また、私達は遺伝子改変マウス作製が得意で、「私の所にしかいない遺伝子改変マウスを一種類でも多く作ること」を目標としております。よって、マウス部屋は色んなマウスでパンパンです。いずれかのマウスで先生方と共同研究出来れば幸いでございます。

2027 年、秋田で皆様にお会いできることを心より楽しみにしております。



栗駒山（神の絨毯）



ラボのメンバー

令和 7 年度日本生体防御学会理事会議事録

開催日時 令和 7 年 9 月 25 日（木）18：00～19：00

場所：熊本大学病院 くすのきテラス 3 階・控室（1）

◆出席者

【理事長】原 博満

【理事】赤池 孝章、安達 穎之、押海 裕之、倉田 祥一朗、澤 智裕、新開 大史、
住本 英樹、中川 一路

【監事】松崎 吾朗

◆欠席者

【監事】金城 雄樹

●議題

1. 令和 6 年度会計報告について

理事長より令和 6 年度の決算報告と会計報告が行われた。令和 6 年度予算案に計上していたオンライン会員管理システム導入費および委託費の支払い時期が令和 7 年度に変更されたため、令和 6 年度決算では 20 万円の支出減であることが説明された。令和 6 年度会計報告書は金城・松崎両監事による会計監査を受け、適正な会計が行われたことが報告された。会員納入率が 6 割程度であり、約 1/3 の会員が年会費を 3 年以上滞納していることも併せて報告された。

2. 令和 7 年度予算案について

例年の収支見込みに加え、日本学術著作権協会分配金の減額により約 5 万円の収入減、オンライン会員管理システム導入費および委託費として 20 万円の支出増を計上したことが理事長より説明され、原案の通り可決された。

3. 会員の動向について

現時点での登録会員数が 158 名（正会員：145 名、学生会員：7 名、名誉会員：6 名、賛助会員：1 社）であることが報告された。

4. 学会財政とその改善案について

会員数の減少から年会費収入も減少しており、令和 2 年度以降から総支出額が総収入額を上回っ

ていることが報告された。本学会の財政予測が示され、恒久的な財源の確保が必須であることが説明された。協議の結果、令和 8 年度より正会員の年会費を 2,000 円増額することが承認された。加えて、継続した財政健全化の議論を要することが確認された。

5. 令和 7 年度生体防御学会奨励賞について

令和 7 年度生体防御学会奨励賞の選考過程について、奨励賞選考委員会委員長である押海理事より報告があった。この報告を受け、本年度の奨励賞を琉球大学熱帯生物圏研究センターのアリ・タンビール氏（業績題目『マウスマクロファージにおける炎症性サイトカイン産生制御機構の解明』）と東北大学大学院医学研究科レドックス分子医学分野の鄭珉境氏（業績題目『進化的に保存された超硫黄分子 cyclo-octasulfur(S₈)の生成と生理機能の解明』）に授与することが承認された。

6. 令和 9 年度 第 38 回学術総会について

令和 9 年度第 38 回生体防御学会学術総会を、秋田大学大学院医学系研究科微生物学講座・海老原敬教授を総会長として開催することが承認された。

7. 本学会における筆頭発表に関するルールについて

理事長より、本学会には学術総会における筆頭発表者に関する規定がなく、非会員学生による研究発表が散見されることが説明された。本学会の学生会員は極めて少なく、学会発表を契機に新規入会を促すことは、本学会の将来を担う学生会員を確保する上で有効な方策であると指摘された。協議の結果、来年度の学術総会より筆頭発表者を学会員に限ることが承認された。

8. 本学会における除名に関するルールについて

理事長より、会員の年会費滞納状況を踏まえ、現実的な年度予算を立案し、かつ年会費納入を促すために、会員資格喪失の規定を明文化する提案がなされた。協議の結果、会則第 2 条【会員】に「第 10 条 会員資格喪失に関する規定」を追加することが承認された。加えて、第 8 条を改正し、退会希望者は未納の年会費を支払うことも承認された。議論を重ねる中で、やむを得ず研究・学会活動が困難な会員を救済する目的で、第 2 条に第 11 条として休会規定を新設することが承認された。

学会事務局からのお知らせ

平素より日本生体防御学会の活動にご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。

令和7年9月26日の総会において、本学会の正会員の年会費改定、及び年会費滞納による会員資格についての会則改定が承認されました。今後の安定的な学会運営のため、以下の内容について何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。

1. 年会費改定について

令和8年4月1日より、正会員の年会費を8,000円から10,000円に改定させていただきます。学生会員の年会費（3,000円）については変更ございません。

令和8年度の年会費支払いにつきましては、来年5月ごろの案内を予定しております。

2. 過年度分の年会費納入について

未納となっている過年度分の年会費につきましては、令和8年3月31日までに必ず納入いただきますようお願いいたします。納入状況、入金方法は、マイページよりご確認いただけます。

<https://member.jshdr.jp/login.php>

ご不明な場合は事務局へお問い合わせください。

3. 過年度分の支払い方法について

クレジットカード、または銀行振込にてお支払いが可能です。

複数年度分支払いの場合、クレジットカード支払いですと、1年分ずつ複数回の決済が必要です。
銀行振込の場合は、合計金額でお振込いただいて差し支えありません。

令和8年4月1日以降、過年度分の年会費はクレジットカード決済ができず、銀行振込のみの対応となりますので、あらかじめご了承ください。

4. 年会費滞納による会員資格について

過去3年分以上年会費を滞納し、催告にも応じない場合、来年度の理事会における決議により、会員資格を喪失する可能性がございます。重ねてご留意ください。

お願いばかりで大変恐縮ではございますが、ご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

ご不明点等ございましたら、事務局までご連絡いただけますと幸いです。

日本生体防御学会現役員（2024年1月～2026年12月）

【理事（理事長）】

原 博満（鹿児島大学大学院医歯学総合研究科）

【理事】（8名）

赤池 孝章（東北大学大学院医学系研究科）

安達 穎之（東京薬科大学薬学部）

押海 裕之（熊本大学大学院生命科学研究所）

倉田 祥一朗（東北大学大学院薬学研究科）

澤 智裕（熊本大学大学院生命科学研究所）

新開 大史（北海道大学人獣共通感染症国際共同研究所）

住本 英樹（九州大学大学院医学研究院）

中川 一路（京都大学大学院医学研究科）

【監事】（2名）

金城 雄樹（東京慈恵会医科大学）

松崎 吾朗（琉球大学熱帯生物圏研究センター）

【運営委員】（20名）

赤池 孝章（東北大学大学院医学系研究科）

安達 穎之（東京薬科大学薬学部）

石井 健（東京大学医科学研究所）

一戸 猛志（東京大学医科学研究所感染症国際研究センター）

岩渕 和也（北里大学名誉教授）

梅村 正幸（琉球大学熱帯生物圏研究センター）

押海 裕之（熊本大学大学院生命科学研究所）

笠松 純（鹿児島大学大学院医歯学総合研究科）

川上 和義（医療法人ひろせ会広瀬病院）

川畠 俊一郎（九州大学名誉教授）

金城 雄樹（東京慈恵会医科大学）

倉田 祥一朗（東北大学大学院薬学研究科）

澤 智裕（熊本大学大学院生命科学研究所）

新開 大史（北海道大学人獣共通感染症国際共同研究所）

住本 英樹（九州大学大学院医学研究院）

高江洲 義一（琉球大学熱帯生物圏研究センター）

土屋 晃介（金沢大学がん進展制御研究所）

中川 一路（京都大学大学院医学研究科）

松崎 吾朗（琉球大学熱帯生物圏研究センター）

宮野 佳（川崎医科大学自然科学）



第36回学術総会の懇親会会場・城彩苑にて

編集後記

今回のニュースレター（NL）では熊本大学の澤智裕先生から第36回学術総会の総括をご執筆頂きました。加えて、今回奨励賞を受賞されたMinkyung Jung先生からも寄稿文を頂きました。また、東京薬科大学の安達禎之先生より第37回学術総会の御案内を頂きましたので、会員の皆様におかれましては奮ってご参加下さい。本ニュースレターでは、下記の連載記事を定期・不定期に掲載しています。今回のNLでは、「受賞者の軌跡」へ長崎大学の井上信一先生から、「研究室紹介」へ秋田大学の海老原敬先生からご寄稿頂きました。ご執筆頂いた先生方へ厚く御礼申し上げます。

【Host Defense の掲載記事】

1. 特別寄稿：本学会の様々なトピックスを掲載。
2. 留学体験記：留学から帰国された会員の留学体験を掲載。
3. 研究室新設のご挨拶：新しく研究室を開設した会員からの近況報告。
4. 受賞者の軌跡：奨励賞受賞後、5年以上経過した奨励賞受賞の近況報告。
5. 研究室紹介：会員の主宰する研究室の情報（研究内容や得意なテクニックなど）を掲載。

（記：鹿児島大学医歯学総合研究科 免疫学分野 講師 笠松 純）

～複製される方へ～

本会は下記協会に複製に関する権利委託をしていますので、本誌に掲載された著作物を複製したい方は、同協会より許諾を受けて複製してください。但し公益社団法人日本複製権センター（同協会より権利を再委託）と包括複写許諾契約を締結されている企業等法人による社内利用目的の複写はその必要はありません。（社外頒布用の複写は許諾が必要です。）

権利委託先：一般社団法人学術著作権協会(JAC)
〒107-0052 東京都港区赤坂 9-6-41 乃木坂ビル
FAX：03-3475-5619 E-mail: info@jaacc.jp

なお、著作物の転載・翻訳のような、複写以外の許諾は学術著作権協会では扱っていませんので、直接発行団体へご連絡下さい。

日本生体防御学会をご支援くださいます、賛助会員の皆様に 深く
御礼申し上げます。

賛助会員（50 音順）

ハウスウェルネスフーズ株式会社

兵庫県伊丹市錆物師 3-20